

中国の高齢化の現状と 高齢者対策

上海市を中心として **その1**

上海大学 東アジア研究センター所長 馬利中

中国の人口高齢化は、人口抑制政策を優先させたため、日本などの高齢先進諸国に比べて以下の特徴がある。それは①高齢人口規模が巨大、②高齢化の速度が急速、③地域的なアンバランス、④都市部で高齢化が先行、⑤経済成長が不十分な時期に高齢化が到来、⑥ベビーブーム世代が高齢化に及ぼす影響が大きいことなどである。

中国政府がここ30年近く、「一人っ子政策」を国策としたことで、人口の自然増加は効果的に抑えられたが、社会・経済の発展に従って、人びとの生活条件も改善され、それにつれて高齢化の趨勢もだんだん目立ってきた。

中国最大の都市である上海市（以下上海）は、改革開放の“窓口”と呼ばれる先進都市であると同時に、少子高齢化のスピードが最も速い地域である。1979年には早くも老年人口の割合が7%となり、中国全土に先駆けて高齢化社会に突入した。

上海の少子高齢化の現状と対策を分析することで、21世紀における中国の少子高齢化の趨勢と社会経済発展にもたらす影響を理解することができると思われる。

上海の高齢化の現状

1982年から2000年の約20年間に、上海の高齢人口が急増したことが上海の高齢化の重要な特徴のひとつである。

1982年の第3回全国人口調査によると、上海の60歳以上人口は、136.5万人、1990年189.1万人、さらに2000年末には245.8万人と、20年間に109万人も増加した。65歳以上人口についても、1982年は88.1万人だったのが、1990年125.1万人、2000年には188.0万人に達し、この20年間に約100万人増加した（表1参照）。

さらに2003年の統計データによると、総人口に占める60歳以上人口の割合は19.0%、65歳以上人口の割合は14.9%に達している。高齢化の進行は加速し、高齢人口

の増加率が他の年齢階級の人口増加率を超え、同時に総人口の増加率をも大きく上回った。上海の高齢化の進行は、すでに中国のトップを切って、日本など高齢先進諸国の平均的なレベルに迫っている。

上海の高齢化のもうひとつの重要な特徴は、この20年間に高齢人口の年齢構造が大きく変化した点である。

1953年の新中国の第1回全国人口調査の時、上海には80歳以上の老人はわずか6,994人しかいなかった。それが、現在、37.6万人に達し、60歳以上人口の14.8%を占めるようになった。

また、最近、100歳以上の高齢者が急増している。1953年第1回全国人口調査では1人であったのが、2003年には454人（男106人、女348人）となり、この現象も内外から注目されている。

出生率、死亡率及び平均寿命の変化

上海の急激な高齢化は、出生率の低下と平均寿命の上昇という二つの要因による。特に出生率の低下は、死亡率の低下以上に重要な要因であると思われる（表2参照）。

新中国成立から20年の間に、上海では膨大な人口の流入と、かなり高い出生率（上海の第1次ベビーブームであった1950年代の年平均の合計特殊出生率は4.56）、いわゆる社会的及び自然的な人口増加によって、人口が大きく増加した。また1960年代から、公衆衛生、母子保健そして計画出産等の運動が推進されるとともに、市民の生活スタイルも変化し、市民意識の面からも急速に少子化傾向が高まることになった。1998年には、

表1 上海市高齢人口構成の変化

単位:万人(%)

年	60歳以上人口 (総人口に占める割合)	65歳以上人口 (総人口に占める割合)	80歳以上人口 (65歳以上人口に占める割合)
1982	136.5(11.5)	88.1(7.4)	10.8(12.3)
1990	189.1(14.2)	125.1(9.4)	17.2(13.7)
2000	245.8(15.0)	188.0(11.5)	29.9(15.9)

馬利中 (Ma Lizhong)

1957年上海市生まれ。1981年上海外国語大学卒。中国人口情報センター研究員、上海人口情報センター室長。1990～91年日本エイジング総合研究センター研究員、92～96年東邦大学大学院公衆衛生学教室、博士号取得。96～98年上海人口情報センター副所長、98～2002年上海老齡科学研究センター副所長。2002年より上海大学東アジア研究センター所長。同大学日本語学部長。発表論文は「中国高齢者の健康とケアの日中比較」(『民族衛生』第61巻(3))、「上海年金・医療改革の最新事情」(『AGING』2001春号)など多数。



合計特殊出生率は0.86と史上最低を記録した。

死亡率の変化と長寿化についてもみてみよう。1951年の死亡率は14.2%、1955年8.1%、1970年には5.0%を下回り、この時期から高齢化は緩慢ではあるが進行が始まり、その後の死亡率も低水準に止まっている。

平均寿命は1951年にはわずか44.4歳であったものが、1954年60歳、1963年70歳超、2003年には79.8歳(男77.8歳、女81.8歳)に達した。1951年と比べると平均寿命は35.4歳延びた。

変容する家族形態

上海においては、従来から都市特有の核家族が多かったことに加え、1960～1970年代からの少子化政策が急速に普及したことで、小家族化は全国に先駆けて進んでいる。

特に1980年代以降は改革開放政策の進行、「一人っ子政策」の実施にともなって、住宅条件が改善され、市民の生活スタイルも変化するにつれ、上海の家族形態も大きく変化し、一層小型化してきた(平均1世帯の構成員数の変化…1964年4.5人、1982年3.6人、1990年3.1人、2000年2.8人、2002年2.7人)。

上海では世帯形態が小型化すると同時に、高齢者がいる世帯の数が急速に増加している。60歳以上の高齢者がいる世帯は、1990年14万世帯、2000年167万世帯で、

10年間で約12倍になった。

競争社会の圧力は増大し、子どもたちは老いた親を顧みる余裕がない。そのうえ、高齢化が日増しに深刻になるにつれ、子どもがいないか、いても身近に住んではない家庭、いわゆる「空巣家庭」も急増している。2003年、上海市統計局が実施した1,000人の65歳以上の高齢者を対象とした調査では、「空巣家庭」が42.7%を占めている。そのうち、一人暮らしは約4分の1、老夫婦のみは約4分の3。高齢者自身の「自立」意識が強まりつつあることが原因のひとつであり、また近年の親子関係の変化の表れでもある。

2000年11月の上海「新民晩報」のアンケートでは、「老親と子どもの同・別居」について、「別居に賛成」6割、「近距離での別居に賛成」3割、「同居に賛成」はわずか1割だった。中国老齡協会が行い、2003年2月に発表された「中国の都市と農村における老齡人口の抽出調査」では、子どもと「同居したい」老人は55.2%、「同居したくない」は31.8%を占めたが、都市部ではすでに42.3%の老人が子どもと「同居したくない」と思っていることがわかった。

上海市統計局の予測では、10年後「一人っ子」の父母たちが高齢者になるにともない、「空巣家庭」は上海の老人家庭の主要な形となり、おそらくは全体の90%以上を占めるようになるだろうという。「空巣家庭」は上海及び中国が直面せざるを得ない現実になっているのである。

以上が上海の高齢化の現状、人口構成の変化、年齢別構造の動向、出生率、死亡率及び平均寿命の変化、家族形態の変化である。

※以上を踏まえた上海市の具体的な高齢者対策である「五つの老有—老有所養、老有所医、老有所為、老有所学、老有所楽(高齢期の扶養、医療、社会参加、趣味娯楽を保障する)—」については次号に掲載する。

表2 上海市の出生率、死亡率、平均寿命の変化

年	出生率(‰)	死亡率(‰)	自然増加率(‰)	合計特殊出生率	平均寿命(歳)
1951	46.6	14.2	32.2	5.10	44.4
1960	27.7	6.9	20.8	2.90	66.5
1970	13.9	5.0	8.9	2.28	72.5
1980	12.6	6.5	6.1	0.87	73.3
1990	10.3	6.6	3.7	1.31	75.5
1995	5.8	7.1	-1.3	0.96	76.0
2000	5.5	5.8	-0.3	0.96	78.8

出所:上海市の人口調査のデータより、上海市の人口と家族計画年鑑